

麓軒主人漢詩集

竹簾軒住田苗雄君ハ我が城北同窓ノ後輩ニシテ
聖社詩會ノ門人ナリ昭和戊寅ノ歲東京ニ生マル
長ジテ橋譽ニ進ミ商學ヲヲ修メ公認會計士ヲ以テ
世ニ名有リ而シテ老來計數鑿行ノ書ニ倦ミ公職ヲ
退ク頃ヨリハ心ヲ蒼頤島迹ノ田舎ニ寄ヤ卒ニ聖社ノ
門ヲ叩ク爾來八年ヲ閱シ詩業漸ク浸ミ歲星七周
庚寅ニ當ルヲ期トシ以テ自作詩集ヲ刊行セテ今止ツ
詩數七十二己ノ齒ニ比スルヤリ 君生平頗ル酒ヲ好ム

らふ子數

一醉興至レバ諷詠朗吟シテ已マズ宛ラ萬天氏ノ
郷ニ没入スルガ如シ余其ノ天ニ具ノ性高尚ノ志ヲ
欣ビ此ニ序ヲ寄ヤ副フルニ一絶ヲ以テス

注 城北ハ都立四中戸山高同窓會ヲ謂ノ君郷ニ會長為リ

城北魁頭賞着雄 老來深入雅文叢
陶朱猗頓豈堪羨 詠詠高吟克有終

平成二十二年歲在庚寅仲夏月 岳堂石川忠久

○戊寅ぼいん|| つちのえとら、昭和戊寅は、昭和十三(一九三八)年。

○橋費はしひ|| 一橋大学を云う。

○計数蟹行かいうの書|| 数学や英語等の横文字の書。

○蒼頡鳥迹の界|| 漢字の世界。蒼頡は黄帝の臣で、鳥の足迹を見て初めて漢字を作った、と云う伝説上の人物の名。

○歳星七周|| 木星が一周するのに要する十二年を歳星と云い、生まれた時を一と数えてその七周目。即ち七十二年を云う。

○庚寅こういん|| かのえとら。平成二十二年がこれに当る。

○葛天氏|| 古代伝説上の帝王の名。教化をしなくとも世の中が平和に治ったと云う。陶淵明の「五柳先生伝」にある語。

城北の魁頭 賈道の雄 老来深く 雅文の叢に入る

陶朱猗頓とうしゅいつんとん 豈あに羨むに堪えんや 諷詠高吟 克よく終り有り

○魁頭|| 城北会長をつとめたこと。

○賈道|| 商業道。

○陶朱|| 越王勾銭を支えた范蠡が、後に呉に移って稱した名。この名の下で巨万の富を築いた。

○猗頓|| 春秋時代の魯の民。陶朱公の教えを受けて牧畜により巨万の富を築いたと云う。

○有終|| 終りを全うすること。詩經「大雅」にある語。

究學橋鬻夙慧人
檢財查貨五旬春
懸車今日縱閑適
愛酒愉詩六紀辰

贈住田篋軒翁 窪寺啓



學を橋鬻に究めし夙慧の人、財を檢し
貨を查し五旬春、懸車今日閑適を

縱いまよにす、酒を愛し詩を愉しむ

六紀の辰 住田篋軒翁に贈る



目次

第一部

新年

戊子新禧

己丑新禧

庚寅新禧

春

新春送友

柳暗花明

芳山花雨

一族相集賞櫻花

墨堤櫻花晚眺

春日閑居

村里野梅

春城過雨

麻生川堤賞櫻

夏

清明展墓

清明即時

田園初夏

與兒孫祝端午節句

乙酉端午未納覽

登樓望遠

登高眺望盛夏夕景

船上納涼

夏夜納涼

夏宵飲酒

漁村夕照

秋

舟夜聞雁

半夜蟲聲

山寺明月

靜夜思鄉

九日登高

萬樹秋晴

樓頭望嶽

冬

冬晴漫步

冬夜偶成

人事

慶賀合辦事業盛行

祝二社合併成立

祝新社屋成

悲新渴天災	36
賀宣堂長壽	37
賀湯島聖堂釋奠復活百周年記念事業完成	38
讀論語	39
旅	
相馬野馬追	40
須賀川城址公園有感	41
宿三保關	42
訪三徳山三佛寺投入堂	43
題友過且末故城址圖	44
訪少林寺	45

第二部

春宵聽笛聲	47
桃花二題	48
其一	
其二	49
吉野三山探櫻	50
春宵聽雨	51
夕暮探梅	52
夕暮梅林	53
平林寺吟行	54
客中聞杜鵑	55

旅中闌子觀	56
登筑波山	57
山中初夏	58
秋夜讀書	59
半夜偶成	60
夜出宮門	61
歲晚鐘聲	62
夕暮小飲	63
題先師讀書圖	64
古稀祝宴	65
其一	
其二	66
愛酒會有感	67
同窓會有感	68
萬華鏡	69
雨夜愉種子島燒酒「南泉」	70
偶成	71
美經贊歌	72
送別張君	73
「簾軒主人漢詩集」發刊にあたって	74

第一
部

葉屋篔軒主人漢詩集



中國

黃居正書



新年



戊子新禧

樂酒吟詩意自安 三孫生長有餘歡
古稀野叟身猶健 獨頌春光天地寬

戊子新禧

酒を樂しみ詩を吟じ 意 自ずから安らかに 三孫の成長 歡び余り有り
古稀の野叟 身は猶お健やかなり 独り春光を頌し 天地寬し

○戊子〓つちのえね、平
成二十年がこれに当る。

己丑新禧

春色玲瓏紫氣重
賽人社殿望芙蓉
天晴風軟寒威減
嶺上呈祥雪似龍

己丑新禧

春色玲瓏 紫氣重なる
賽人社殿より芙蓉を望む

天晴れ風軟かに寒威減ず
嶺上祥を呈し雲龍に似たり

○己丑〓つちのとうし、平成二十一年がこれに当る。
○賽人〓参詣する人。

庚寅新禧

瑞日暉暉身此新
干支七度壽康身
吟詩相集樽前坐
椒酒重杯萬歲春

庚寅新禧

瑞日暉々として年此こに新たなり
干支七度び壽康の身
詩を吟じ相い集いて樽前に坐す
椒酒杯を重ねたり万歳の春

○庚寅〓かのとら、平成二十二年がこれに当る。
○椒酒〓さんしょを入れた酒、正月の屠蘇。

春



新春送友

旭日遙然、春色催
 新春淑氣自東來
 行人今去瑞雲下
 悠遠前途將欲開

新春に友を送る

旭日遙然として春色催す

新春の淑氣 東より来る

行人今去る 瑞雲の下

悠遠たる前途 將に開けんと欲す

○淑氣＝春のなごやかな氣。

柳暗花明

柳條縷縷遶池塘
 花杪明明映畫堂
 攜友曾遊張飲處
 春酣再訪意堪傷

柳暗花明

柳條縷々として池塘を遶り

花杪明々として画堂に映ず

友を携え曾遊 張飲せし処

春酣にして再訪 意傷ましむるに堪えたり

○曾遊＝かつてした旅行。

○張飲＝幕を張りめぐらして酒盛りをすること。

芳山花雨

千株風動遠眸新 紅靄齊天彩雨頻
今日何論明日事 芳山清晝樂酣春

芳山の花雨

千株風動き

えんぼう 遠眸

新たなり

紅靄あひ天ひとに齊しく

彩雨しき頻りなり

今日何ぞ論ぜんや明日の事

芳山の清昼

酣春を樂しむ

○酣春は春たけなわ、春のまつ盛り。

一族相集賞櫻花

風温陽麗見春來 紅雪霏霏入酒杯
兒子嬉遊青草上 賞櫻盡日氣悠哉

一族相集いて櫻花を賞す

風温かく陽麗ひるあかりしく

春の來たるを見る

紅雪霏々として

酒杯に入る

兒子は嬉遊す 青草の上

桜を賞して尽日

氣は悠なる哉

墨堤櫻花晚眺

來會夕陽江上春 東風一醉踏青人
長堤十里花吹雪 電燭煌煌興最真

墨堤の桜花晚眺

來り会す夕陽 江上の春 東風一醉 踏青の人
長堤十里 花 雪を吹き 電燭煌々 興 最も真なり

○踏青＝若草を踏む意で、春に郊外で遊ぶこと。

春日閑居

終日悠然樂物華 疏籬滄水粹人家
微波漸漸魚吹絮 喋喋搖枝雀啄花

春日閑居

終日悠然として 物華を樂しむ 疎籬滄水 粹人の家
微波漸々 魚絮を吹き 喋々枝を揺らせ 雀花を啄む

○物華＝優れた景色。
○滄水＝たまり水、庭の小池。
○絮＝種子(柳)のわた毛。

村里野梅

日出三竿啼鳥頻 光暉滿路綠將勻
閑行信步覺杏氣 梅發暖來墟里春

村里野梅

日出でて三竿 啼鳥頻りなり 光暉路に満ちて 緑 將に勻わんとす
閑行 歩に信せれば 香氣を覺ゆ 梅發き暖來たる 墟里の春

○三竿＝日の影の長さが竿の三倍位になる時刻、午前八時頃。
○墟里＝村ごと。

春城過雨

絲雨瀟瀟曉不晞 柳枝飄搖欲沾衣
千兵萬騎陣行處 石壁靜閑人訪稀

春城過雨

糸雨瀟々 曉わら晞かず 柳枝飄搖として 衣を沾さんと欲す
千兵万騎 陣行の処 石壁静閑として人の訪なうこと稀なり

○覺＝いしだたみ。

麻生川堤賞櫻

水暖堤塘萬朵花
悠悠散策日將斜
紅雲香雪使人醉
滿眼風情志返家

麻生川堤にて桜を賞す

水暖む堤塘万朵の花 悠悠散策すれば 日將に斜めならんとす

紅雲香雪人をして酔わしむ 滿眼みんげんの風情ふうじょう 家に返るを忘る

夏



清明展墓

掃苔沃水讀銘碑
追慕先君憶往時
惆悵精魂何處去
五重塔上白雲移

清明に展墓す

苔こけを掃い水を沃そそぎ 銘碑めいひを讀む 先君せんきんを追慕おそし往時わうじを憶おぼう

惆悵ちやうたうす精魂しやうこん 何処どこにか去る 五重ごじゆうの塔上たかの上 白雲はくうんは移る

○先君亡くなった父。

清明即時

天氣清和春物菲 乘風雙燕掠軒飛
縹書敲白閑亭裏 棄却塵緣客至稀

清明即時

天氣清和にして春物非なり 風に乗る双燕 軒を掠めて飛ぶ
書を縹ひもとき句を敲たたく閑亭の裏 塵縁を棄却し客至ること稀なり

○非ひ々、草木が盛んに
茂る様、花が咲きほこる
様子。
○塵縁ちんげん＝世間の煩わしい関
係。

田園初夏

燕群疇上送春飛 梅子枝頭迎夏肥
老若挿秧光滿水 薰風吹渡散餘暉

田園初夏

燕群ちゆうぐん疇ちゆう上に春を送って飛び 梅子は枝頭に夏を迎えて肥ゆ
老若挿秧らうじやくそうおうし 光は水に満つ 薰風吹き渡って 余暉を散ず

○疇ちゆう＝うね、転じて田畑
○挿秧そうおう＝稲の苗を植える、
田植え。
○余暉じよゐ＝夕陽の光、日没後
も空に残っている光。

與兒孫祝端午節句

鯉幟翩翩占碧天
薰風颯颯過菖淵
他年支國紙兜子
村老欣嘉瑞兆全

兒孫と端午節句を祝す

鯉し幟し 翩翩 碧天を占し

薰風 颯々 菖淵かきを過る

他年国を支えむ紙兜の子

村老欣嘉す 瑞兆の全きを

乙酉端午示孫兒

簷前新竹戰薰風
淺緑蕭蕭映碧空
端午孫兒欣躍戲
乃翁期汝大成功

乙酉いっせうの端午孫兒に示す

簷えん前の新竹 薰風かんのに戦く

端午孫兒 欣躍きんでくして戯るたわむ

浅緑蕭々として碧空に映す

乃翁だにおう汝が大いに功を成さんことを期す

○乙酉いっせうのとき、平成

十七年がこれに当る

○乃翁だにおう乃な(なんじに孫兒)の翁、即ち自分のこと。

登樓望遠

登樓遙望暮烟和翠靄連山似大波
天氣新涼千里眺黃昏月上影如磨

登樓望遠

登樓遙かに望めば暮烟きよけ和む

翠靄すいあいの連山 大波おほなみの似し

天氣は新涼 千里の眺め

黃昏月上り 影磨くが如し

登高眺望感夏夕景

七月黃昏禾黍風 漁歌送盡釣竿翁
天恩地力悠悠在 一片浮雲夕照中

高きに登りて盛夏の夕景を眺望す

七月黃昏 禾黍かしよの風 漁歌送り尽す 釣竿ちよかんの翁

天恩地力 悠悠として在り 一辺の浮雲 夕照の中

○禾黍かしよ || 禾いねと黍き
び。

船上納涼

織女牽牛七夕天 清霄斟酒在船舫
湖中燈火如星彩 風爽三更未返船

船上納涼

織女牽牛 七夕の天 清宵 酒を斟んで船舫に在り

湖中の燈火 星彩の如し 風爽やかに三更 未だ船を返さず

夏夜納涼

歌姫曠野列紅裳 嬌嬈琴聲笛韻揚
銀漢淡然風籟爽 夏時韃韞是仙鄉

夏夜の納涼

歌姫は曠野に紅裳を列ね 嫋々たる琴声 笛韻揚る

銀漢淡然として 風籟爽やかなり 夏時の韃韞 是れ仙郷

○風籟 風の音。

○韃韞 ㇿタール(族の住む地方、蒙古。

夏宵飲酒

日暮暑氣猶未收 三三五五趁涼遊
摩天樓上仰銀漢 酌酒歡談夜色流

夏宵に飲酒す

日暮れ暑氣なつ 猶お未まだ収まらず 三々五々 涼を趁おうて遊ぶ

摩天樓上 銀漢を仰ぎ 酒を酌み飲談すれば 夜色流る

○氛いづ、大氣。

漁村夕照

三两節簷浦口方 無邊青海白鷗揚
離郷十歳家書絶 夕照維舟獨斷腸

漁村の夕照

三両の茆ぼう 浦口の方 無辺の青海に白鷗揚がる

郷を離れて十歳 家書絶えたり 夕照舟を維つないで独り断腸

○三両 = 二三三三。

○茆簷 = 茆(かや)の家の

秋



舟夜聞雁

空中何物夜徘徊 孤月翻飛入我杯
舟上遊聲南渡雁 西風揚浪覺秋來

舟夜雁を聞く

空中何物ぞ 夜 徘徊す 孤月翻飛し 我が杯に入る

舟上声を追えば 南渡の雁 西風浪を揚げ 秋の来るを覚ゆ

半夜蟲聲

舊春折柳送郎君 今夜批燈獨綴文
此地月明蟲語密 江都定是不容聞

半夜の虫声

旧春柳を折りて郎君を送る 今夜灯を挑げて独り文を綴る

此の地 月明らかに虫語密なり 江都は定めて是れ聞くを容さざらむ

山寺明月

幽徑窮邊峻嶽屏 門前碑石古苔青
先師曾坐此圓屋 懷舊誦詩明月庭

山寺明月

幽徑窮まる辺り峻岳の屏

門前の碑石

古苔青し

先師曾て坐す此の円屋

旧を懐いて詩を誦す明月の庭

○幽徑 人氣のない静かな
こみち。

静夜思郷

三更月白小茅堂 桂樹風揺馥郁香
着艾思歸歸不得 安寧居處是家郷

静夜郷を思ふ

三更月は白し

小茅堂

桂樹風揺るがし

馥郁として香し

着艾帰を思えど

帰るを得ず

安寧に居る処

是れ家郷

○着艾 老人、艾は五十才
を云う。

九日登高

九日登高憶往時
偷生白鬢百憂滋
籬垣黃菊秋將暮
獨酌浮英酒一危

九日登高

九日登高

往時を憶う

生を偷み白鬢 百憂滋し

籬垣の黄菊 秋 將に暮れむとす

独り酌む英を浮べし酒一危し

○后こさかすき。

萬樹秋晴

鼓笛交聞氣自揚
翩翩旗幟映秋陽
豐年滿作神助足
社日天高萬樹黃

萬樹秋晴

鼓笛交こまごも聞え 氣自から揚がる

翩翩ひんたる旗幟きし

秋陽に映ず

豐年滿作 神助足る

社日天高く

萬樹黃なり

○社日しにちは春秋の祭の日、立
春及び立秋の後の第五の
戌つちのえの日に豊
作を祈り、収穫のお礼を
した。

樓頭望嶽

登樓近看翠羅張
遠望連山如海波
夕照殘黃圓月上
天高地浩爽吟哦

樓頭岳を望む

登樓近く見る翠羅を張るを 遠望すれば連山 海波の如し

夕照殘黃 円月上る 天高く地は浩し吟哦さわやかなり

○吟哦いんおうたう。詩歌を口ずさむ。

冬

冬晴漫歩

退隱歸來故苑塘
冬晴漫歩筑山蒼

離郷六十年前事
依舊家家橘柚香

冬晴に漫歩す

退隱歸り来る 故苑の塘 冬晴に漫歩すれば筑山蒼し

離郷は六十年前の事 旧に依り家々は 橘柚香し

○筑山＝筑波山。

冬夜偶成

小院梧桐落葉稠 出鄉多歲夢空周
殘燈獨坐思千里 堂上寒光月似鉤

冬夜偶成

小院の梧桐 落葉稠し 郷を出でて多歳 夢空しく周る
残灯に独り坐し 千里を思ふ 堂上の寒光 月鉤に似たり

人事



慶賀合辦事業盛行

共興工廠已三年 勤恪丁男及數千
言即實行行即達 日中協力友情全

合弁事業の盛行を慶賀す

共に工廠しようを興して已に三年 勤恪の丁男 數千に及ぶ
言即ち実行 行即ち達す 日中の協力 友情全し

○勤恪 ひとつとめつつしむ、職務を忠実につとめる。

○丁男 成年の男子、働きざかりの男子。

祝ニ社合併成立

立新何年併合辰 雄圖茲就自無倫
日東今日國均亂 欲耐辛勤意氣新

二社の合併の成立を祝す

計を立て何年 併合の辰

雄圖茲こゝろに就なつて自ずから倫無し

日東今日國均乱る

辛勤に耐えんと欲して意氣新たなり

○倫とくはたぐい。同類。

○國均こくごは國の情勢。

祝新社屋成

十二層樓壓比鄰 滿然洒脱出浮塵
新香梁棟興家運 滿室集來慶賀人

新社屋なるを祝す

十二層樓 比隣を圧す

滿然洒脱 浮塵を出づ

新香の梁棟に 家運興る

室に滿るは 集い來る慶賀の人

悲新瀉天災

地震風狂中越郷 山崩河溢梯田荒
牧牛池鯉將全滅 再見何時村業昌

新瀉の天災を悲しむ

地は震い風は狂う 中越の郷 山崩れ河溢れ 梯田荒れる
牧牛 池鯉 將に全て滅せんとす 再び見ん 何れの時か 村業の昌んなるを

賀萱堂長壽

萱堂九十五春秋 矍鑠高吟意自優
今日兒孫相集宴 期頤更願氣悠悠

萱堂の長壽を賀す

萱堂けんだう九十五春秋 矍鑠かくしやく高吟して意自ら優なり
今日兒孫相集いて宴す 期頤きいを更に願つて氣は悠悠

○萱堂＝母親のこと。昔、母親は北堂に居て、憂いを忘れるべく庭に萱草（わすれ草）を植えたので云う。

○期頤＝百歳のこと。

賀湯島聖堂釋奠復活

百周年紀念事業完成

大殿装更釋奠晨園林整整薰風巡
杏壇門外楷枝爽聖像昭然一百春

湯島聖堂の釈奠復活百周年記念事業の完成を賀す

大殿装よそお更あらたま釋はな奠まつ晨あした

園林整々として薰風ぬぐ巡る

杏壇門外きやうだん楷枝爽かいか

聖像昭然 一百春

○釈奠しやくだんはいけにえを供えて昔の賢人や聖人を祭ること。

○昭然しやうぜんはつきりと明らか
な様子。

讀論語

高揭斯文書正芳 虚心熟讀意揚揚
學而堯曰無邪思 珠玉金言五百章

論語を読む

高くし斯文ぶんを掲かげて書正かんばに芳よし

虚心こころに熟よく讀よめば意いは揚あげたり

學まなびぶりて堯ぎやう曰いふ無な邪じやの思おもひ

珠玉たまごの金言かねご 五百章

旅



相馬野馬追

甲騎軍營列玉鞍
嘶聲萬喚破春寒
競逐駿馬高原埒
卷土奔馳往昔看

相馬の野馬追い

甲騎の軍營 玉鞍を列ね
駿馬を競い追う高原の埒

嘶声万喚 春寒を破る
卷土の奔馳 往昔の看

須賀川城址公園有感

古城麗日浴春光
風暖林園馥郁香
往昔公侯營邸處
今朝黎庶庶民花王

須賀川城址公園にて感あり

古城の麗日 春光に浴す
風暖き林園 馥郁として香る
往昔公侯の邸を営みし処
今朝 黎庶 花王を賞す

○黎庶 多くの人民、庶民。
○花王 牡丹の別名。

宿三保關

三級沙洲十里松 高樓倚几望芙蓉
羽衣仙女歸天處 雁影迢迢客恨重

三保ヶ関に宿す

三級の沙洲 十里の松

高樓几に倚り 芙蓉を望む

羽衣の仙女 天に帰りし処

雁影迢々 客恨重なる

○几＝ひじかけ、脇息。
○迢々＝高く遠い様子。

訪三徳山三佛寺投入堂

曲根踏躑躅盤珊擦手足瘃行路難
卒見伽藍倚崖壁一驚往昔技能完

三徳山三仏寺の投入堂を訪ぬ

曲根錯節 躑躅して盤珊す 手擦り足瘃き 行路難し

卒かに見る伽藍の崖壁に倚るを 一驚す 往昔の技能の完きに

○錯節＝いりくんだ木の節。
○盤珊＝よろめき歩く様子。

題友過旦末故城址圖

沙上僅存羌域城 烈風吹起斷腸聲
榮華殷賑張原如夢 陶片仍催傷惻情

友の旦末故城址を過るの図に題す

沙上僅かに存す 羌城きょうじきの城 烈風吹き起こる 断腸の聲

榮華いんけん殷賑もと張原の如し 陶片しんせき仍りに催す 傷惻の情

訪少林寺

嵩山山麓梵王宮 棟宇堂麗有古風
管長勸吾甘露盃 諄諄訓戒坐談中

少林寺を訪ぬ

嵩山山麓の梵王宮

棟宇堂麗

古風有り

管長吾に勸む甘露の盃

諄々訓戒す

坐談の中

庚寅年新春

中國畫居正書於怡心齋



第一部 完



第二部

樂酒吟詩意自安
三孫生去月
有餘歡古稀
野變身猶
健獨領春光
天地寬

戊子新春詩

十日畫美人



春宵聽笛聲

流水行雲幾旅程 相逢故友晚風清
餐英共酌明燈下 靜聽春宵玉笛聲

卒業してから幾十年
逢えて嬉しや夜風が涼し
菜の花食べて共に酌み
シヤンデリアの下笛を聴く

春宵笛声を聴く

流水行雲幾旅程 故友に相逢いて 晚風清し
英を餐し共に酌む 明燈の下 静かに聴く 春宵 玉笛の聲

桃花二題 其一

老年致仕故園回 迎我桃花艷麗催
正是茅廬安住處 春風撫頰笑眉開

年老引退 古巢に回る
庭の桃花のうるわしさ
このボロ家こそ我が安居
春風吹いてにこにこ

桃花二題 其の一

老年致仕し故園に回る 我を迎う桃花 艷麗催す
正に是れ茅廬 安住の処 春風頰を撫で 笑眉開く

○致仕＝官職をやめる、辭職。
○茅廬＝茅ぶきのいおり。そまつな家。

其二

桃園幽徑且徘徊 花下草茵孤酌催
頃刻詩成塵境外 春風駘蕩醉顏開

桃の花園ぶらぶら散歩
草のしとねで花見酒
これぞ仙境詩も出来た
酔って春風心地よし

其の二

桃園の幽徑 且く徘徊 花下の草茵 孤酌催す
頃刻詩成る 塵境の外 春風駘蕩 醉顏開く

○頃刻＝少しの間。しばらくくしつ。

吉野三山探櫻

芳野三山萬樹花 紅雲香雪日將斜
此時無酒使人醉 恍惚彷徨忘復家

芳野の桜は数知れず
雲か霞か日暮れも迫る
酒も無いのに酔心地
まだ歩きたや家忘れ

吉野三山に探櫻す

芳野三山 万樹の花 紅雲香雪 日將に斜めならんとす
此時酒無くも人をして酔わしむ 恍惚として彷徨し 家に復るを忘る

春宵聽雨

作客多年瘦骨成 牀前獨酌到三更
遙思故里青燈下 軒滴催歸夜雨聲

旅又旅で年老いた
独り酒酌む夜更け刻
郷を思つて灯を見つめれば
雨だれ更に郷思わせる

春宵聽雨

客と作り多年 瘦骨成る 牀前獨酌し三更に到る
遙かに故里を思ふ 青灯の下 軒滴歸を催す 夜雨の聲

○瘦骨||老いて瘦せた身体。

夕暮探梅

幽徑携筇短日斜 樹梢不囀宿棲鴉
東風習習清香底 淡罩春情月下花

梅の林を散歩すれば
早や日も暮れて烏も鳴かず
春風そよそよ香をはこぶ
月下の花に春こもる

夕暮探梅

幽徑に筇を携えれば短日斜めなり 樹梢囀ぜず宿棲の鴉
東風は習々清香底る 淡く春情を罩む 月下の花

夕暮梅林

信步梅林晚愈新 白花朧月得逢春
微風來去芳香動 踏影幽蹊按句人

ぶらぶら梅林夕まぐれ
白梅咲いて月おほろ
そよ風はこぶ良い香り
己が影踏み句をひねる

夕暮の梅林

歩まに信ます梅林 晚ふれいよたよに愈よよ 新あたらたなり 白花朧月 春に逢うを得たり
微風來去し 芳香動く 影を踏む幽蹊 句を按ずるの人

○幽蹊は人氣のない静かな
小みち。

平林寺吟行

禪林幽寂淺春中 蔓古諸堂料峭風

池鯉悠悠還躍躍 梅花千朶白兼紅

春まだ浅き平林寺
古き蔓に風寒し

池の錦鯉の良き姿
紅梅白梅千朶の園

平林寺吟行

禪林幽寂たり淺春の中 蔓古る諸堂料峭りようしょうの風

池鯉悠悠ま還た躍やくやく々々 梅花千朶白と紅と

○料峭りようしょう＝風が肌はだにふれて冷たい形容。早春の寒風を云う

客中聞杜鵑

村墟散策暮雲霽 客舎遠離程欲迷

返照蕭蕭風弄影 家山千里一鵑啼

夕焼け空に村里めぐる
宿遠さかりしちちらへ向かおう
影黒々と風にゆれ
郷は遠いなほととぎす啼く

客中杜鵑を聞く

村墟散策すれば暮雲霽れたり 客舎遠く離れ程迷わんと欲す

返照蕭々として風影を弄す 家山千里一鵑啼く

旅中聞子規

睡覺山中月漸低 高音吐血杜鵑啼
閑愁來襲歸心累 孤客通宵氣慘淒

夜中に目覚めりや月は西
血を吐くひびきはほととぎす
帰心をあおり気もそぞろ
夜通し心痛むかな

旅中子規を聞く

睡り覚むれば山中に月漸く低し 高音血を吐いて杜鵑啼く
閑愁來襲し帰心累し 孤客通宵氣は慘淒

○慘淒Ⅱいたみ悲しむ。

登筑波山

喘喘登高黎杖陪 清風散汗拂煙埃
巖頭正覺蒼天近 鞋底關東八國開

杖を頼りに喘いで登りや
青空近き山頂に着く
風に汗消え霧も齋れ
眼下に開く関八洲

筑波山に登る

喘々ぜんぜん登高し黎杖陪す 清風汗を散じ煙埃えんあいを拂う
巖頭正に覚ゆ蒼天に近きを 鞋底あていに關東八國開く

○喘々Ⅱ息切れしてはあは
あとあえぐ様子。

山中初夏

山深五月躑花紅 麗日天青度凱風
探勝騷人斜石徑 一斟低唱綠陰中

五月の山の紅つつじ
風も薫つて日はうらら
山道ふらりと風流人
木陰で一杯一うなり

山中初夏

山深く五月 躑花紅なり
麗日天青く 凱風度る
探勝の騷人 石徑斜めなり
一斟低唱す 緑陰の中

秋夜讀書

籬邊金桂早知秋 春出郷關半歳周
萬卷繙書愉尚友 思馳千里月如鉤

金桂咲いて秋来たる
春に上京半年過ぎた
書数多あまた読み古人知る
郷こを思いて三日月仰ぐ

秋夜読書

籬辺の金桂に早くも秋を知る 春郷関を出で 半歳めぐ周る
万巻書を繙たのしき尚友を愉む 思おもいは千里を馳け月鉤の如し

○金桂 金木犀。
○尚友 昔の賢人を友とす
る。古書に親しむ。

半夜偶成

三更醒寤拂障屏 氣爽池邊萬點螢
齒豁頑童憶來世 上頭銀漢滿天星

夜中に目覚め窓開けりや
池辺の螢銀河のごとし
老年齒も欠けあの世を憶う
あの銀漢に上るのか

半夜偶成

三更醒寤し障屏を払う 氣爽やかに池辺万点の螢
齒豁頑童 來世を憶う 頭を上ぐれば銀漢に満天の星

○齒豁＝齒が欠け、すきまのある様。

○頑童＝頑固で道理の分らない子供。

○齒割頑童＝子供に似て来た老人を云う。

夜出宮門

寂寂無人出御門 素娥皓皓照朝衣
朔風紫陌寒逾酷 困憊辛勤深夜歸

殘業終つて門を出りや
月皓皓と身を照らす
風ひゆうひゆうと道寒し
疲れ背負った此の夜深け

夜官門を出づ

寂々無人の御門を出づ 素娥皓々として朝衣を照らす
朔風の紫陌 寒逾よ酷し 困憊辛勤 深夜に帰る

○素娥＝白い月の光の美称。

○朝衣＝役人が朝廷に出仕する時に着る服。

○紫陌＝帝都の道路。都大路。

歳晚鐘聲

除夕鐘聲百八回 願懐今歳且停杯
團樂一族爐邊願 青帝恩波早早來

除夜の鐘聞きふと杯を置く
今年を回顧し感無量
一族炉辺で賑やかに
春よ来い来い幸せよ来い

歳晚鐘聲

除夕の鐘声百八回る 今歳を願懐し且く杯を停む
團樂の一族炉辺に願う 青帝の恩波早々と来るを

夕暮小飲

城東人散夕陽斜 携杖頭錢過酒家
織手細腰羅袖舞 新妝恰似白梅花

街の東の夕まぐれ
財布片手に飲みに出る
なよなよ舞える乙女子は
白梅にも似るあで姿

夕暮小飲

城東人散夕陽斜めなり 杖頭錢を携えて酒家に過ぎる
織手細腰羅袖の舞 新妝恰も似たり白梅の花に

○杖頭錢＝酒を買う金。晋の阮修は、酒を買うために、いつも百錢を杖の頭にかけていた故事による。

題先師讀書圖

端嚴品格白頭人

螢雪難行經幾春

端坐白頭我が先師

螢雪の勞幾春秋

閑坐五車書架畔

尊仁說道意循循

書庫の藏書は五車を超え
仁道説いて意は循循

先師読書の図に題す

端嚴たる品格 白頭の人

螢雪の難行 幾春をか経たる

閑坐す五車の書架の畔

仁を尊び道を説き 意は循循たり

○五車書架＝五台(沢山)の
車に積む程多くの書籍を
収めた書架

○循々＝順序正しく整然と
している様子

古稀祝宴 其一

風爽高樓散暮煙

迎君酌酒慶椿年

高殿は風爽やかに霧もはれ
君と喜ぶ古稀の酒

松濤月影兩相好

不盡交歡何意眠

松風月影共に良し
話は尽きず眠気なぞ来ぬ

古稀の祝宴 其の一

風爽やかに高樓 暮煙散ず

君を迎えて酒を酌み 椿年ちんねんを慶ぶ

松濤月影 両つながら相好し

尽きず交歡 何ぞ眠るを意わんや

○椿年＝年寿、椿齡、長が
生き、又はその人を云う。

其二

美酒佳肴賀古稀 中天月白影依依

蓬萊仙閣樽傾盡 歡樂良宵去似飛

美酒酌んで古稀祝う
月影おぼる肴もうまし
日本一のこのお店
楽しい時は飛んで去る

古稀の祝宴 其の二

美酒佳肴にて古稀を賀す

中天月は白く影依々たり

蓬萊の仙閣に樽傾け尽す

歡樂の良宵去ること飛ぶに似たり

○依々りばんやりと見える様。

愛酒會有感

相逗江邊美酒多 紅燈映水如星河

宴終歸路長橋上 朗朗吟詩渺渺波

相逗の河端ビール倉
紅灯川面に銀河の如し
酒樂しんで帰り道
酔つて吟ずりや波ゆらゆら

愛酒會に感有り

相逗の江邊 美酒多し

紅灯 水に映じて星河の如し

宴終り歸路 長橋の上

朗々詩を吟ず 渺々の波に

同窓會有感

沐雨櫛風俱老衰 今忘久濶會朋師
重杯談笑旗亭晚 探得童顏想往時

風雨幾年共に老ゆ
師友に会うは久し振り
共に酒酌むこの良き夜
童顏浮び懐しや

同窓會に感有り

沐雨櫛風 共に老衰 今久濶を忘れ 朋師と会す
杯を重ね談笑す旗亭の晩 童顏を探り得て 往時を想う

○櫛風沐雨 軍人が従軍し、野外で苦勞するたとえから各種の事業で苦勞をするたとえ。

萬華鏡

筒中異類鏡生花 變幻呼春平又斜
自促情懷同幼孺 無心忘却俗寰家

筒の中には天使が居るか
縦横斜め鏡の花に
子供心にすっかり帰り
家の俗事は暫く忘る

萬華鏡

筒中は異類 鏡花を生ず 變幻春を呼ぶ 平又斜
自おのずから促す情懷 幼孺かえに回るを 無心忘却す 俗實かんの家

○幼孺 幼い乳飲み児。
○俗實 俗世間。

雨夜愉種子島焼酒「南泉」

跨海傳來萬里程 南泉欲酌酒香清

重杯談笑東都友 遮莫雲迷雪意生

海を渡って何万里

「南泉」酌めば香り良し

東都の友と欲談す

雪もよいなぞ何のその

雨夜 種子島焼酒「南泉」を愉しむ

海を跨ぎ伝来す万里の程 南泉 酌まんと欲すれば酒香清し

杯を重ね談笑す東都の友と さもあらばあれ 雲迷つて雪意生ずるを

○遮莫…：のことなどどう
なりよとまますよ。

偶成

多年在野豈求名 落落如今白髮明

愛酒常交青眼士 世人可笑一狂生

根っから野に在る無名人

老いも来たつて髮白けれど

酒を愛して友も良し

笑わば笑え我は我

偶成

多年野に在りて豈に名を求めんや 落々如今 白髮明らかなり

酒を愛し常に交わるは青眼の士 世人笑う可し一狂生

○落々…：まばらで少なくとも

の淋しい様子。気性が偏
屈で他人と相いれない様
子。

○如今…：ただ今、現在。

美經賛歌

千金勿拒沽醇醕 客到俱斟娜媛亭

萬化更餐肴枝美 來書又訴幾旬經

金を惜しまず斗酒酌もう
客とも相斟む佳人の亭
板さん工夫の肴は美味し
ママの手紙は又来てね

美經賛歌

千金拒む勿れ醇醕を沽うを 客到れば俱に酌む 娜媛の亭

萬化更に餐す肴核の美なるを 來書又訴う幾旬経たると

○娜媛はしとやかで美しい嬢

送別張君

陽關三疊別離樓 苦學扶桑經幾秋

志業茲成將赴任 酒杯傾盡路悠悠

これで別れの「無からん」三疊
日本留学苦勞の後に
志遂げおめでとう
前途悠々もつと飲め

張君を送別す

陽關三疊別離の樓 苦學扶桑に幾秋をか経たる

志業茲に成り將に赴任せんとす 酒杯傾き尽せ 路悠々

第二部 完

「饒軒主人漢詩集」発刊にあたって

漢詩を作ることを始めたのは、8年前に監査法人を64歳で退職した直後からである。公認会計士という職業柄、数字と英語の世界で神経をすり減らす毎日であったが、そこから解放されて、血圧も140→90から130→80に下がった。横文字世界から解放された反動で、昔好きで、且つ得意であった漢文の世界に戻ろう、と、湯島聖堂の門をたたき、石川先生の漢詩作法の講座に入れていただいた。

その時に、70歳の正月は、自作の漢詩を自ら書して床の間に飾り、それを自吟して美酒で祝いたい、との長期計画を建て、聖堂朗詠会の初中級のクラスにも入れていただいた。

漢詩の方は、その後初級の講座を開かれた窪寺先生の授業と、石川先生の上級の方にも入っていたいただき、最低でも毎月3首、年30首を作り続けている。

お陰さまで、70歳の正月の目標を達成することができた。これもひとえに不出来の弟子の作品に対し、丁寧にご指導くださった石川岳堂先生、窪寺貫道先生のご指導の賜物であり、両先生に深く感謝申し上げる次第である。又、詩集発刊に当って石川先生より「序」と七絶

一首、窪寺先生より七絶一首を頂戴した。身に余る光栄であり、心より御礼申上げたい。

今年は7巡り目の寅年で、72歳になる記念に、これまで作りためた約200首のうちから72首を選んで、詩集に纏めることとした。

第一部は、主として二松詩文に投稿して採用していただいたもの45首からなる。白文の部分は、中国の書家である黄居正先生に書いていただいたものを、縮尺して活用させていただいた。大変に美しい書体でわが詩集を飾ることができて、黄先生のご厚意に深く感謝申し上げます。扉は、黄先生にお書きいただいた、世界でただ一冊の小生の漢詩集の表紙を、撮影したものである。

黄先生は1932年、陝西省華県でお生まれになり、1955年に西北芸術学院（現西安美院）を卒業。長く書画の創作と指導に当たられ、また、戯曲中の人物画や文学作品中の人物の書方の研究に従事され、成果は多くの媒体で報道されている。

現在は、国家一级美術師であり、元鄭州画院常務副院長、鄭州大学書画研究院名誉院長、鄭州市文化局芸術專家委員会委員、政協鄭州市第八期委員会委員などを歴任された方である。

黄先生とのご縁に触れておきたい。

小生の弟が筑波大学の大学院工学研究科の教授をしているが、そこに中国から、張恭君が留学してきた。張君は日本に来る前に日本語を吉林大学で学んだのだが、そのときの日本語を教えた先生が、小生並びにわが妻の都立戸山高校の同期生であった。そういうわけで、張君の留学中の2年間は、日本での親代わりのようなつもりで、月に一度は会って、食事しながら相談に乗って差し上げた。黄先生は、この張君の母方の祖父で、小生の張君へのお世話を大変に多とされて、折に触れて美しい書を送って下さった。例えば、杜甫の、「蜀相」の書軸とか、陶淵明の、「帰去来の辞」の書冊子などは小生の宝物になっている。少林寺官長の永信大師の友人であるご縁で、一昨年の、石川先生と行く漢詩愛好家の旅行では、大師と一同親しくお茶をいただきながら、お話を頂戴したことも、記憶に強く残っている。黄先生とはこのとき初めて、張君のご両親ともども、お目にかかった次第である。黄先生は、この旅行の一行の柏梁体と紀行詩を全て書いて下さった。

第2部は、主として比較的最近の作の中から27首を選んで、第1部と合わせて72首とした。こちらのほうは、白文は活字、書き下しも活字であるが、その代り、1首ごとに訳詩をつけることとした。詩意を理解していただく上で、参考としてお読みいただければ幸甚である。

扉は、先に述べた70歳の正月に床の間に掲げた小生の書(第1部冒頭に掲げた詩を書したものを撮影したものである。書のほうは正式に師について修行したわけではなく、恥ずかしい出来であることは自覚しているのだが。これについては、全日本漢詩連盟や、東京都漢詩連盟で仕事をお手伝いいただいている早稲田大学の綾部光洲先生にご指導いただいた。改めて感謝申し上げます。

良師良友に恵まれて、また、不思議な日中間にまたがる人の縁にも恵まれて、ともかくも一書を上梓出来たことは、真に嬉しい限りである。さらに研鑽を積んで、この道の発展の一端を担えるように努めたいと考えている。

最後に、小生の初めての出版について色々のご配慮いただいた、(株)大和メディアクリエイティブの、原田社長と、担当の新河さんに感謝しつつ、お礼を申し上げます。